

知覚的表象と目的論的意味論

前田 高弘

無所属

目的論的意味論は、志向性の自然化を目指す自然主義的意味論のなかでも因果論的意味論と並ぶ主要な立場であるが、生体内で表象を生成ないし利用するメカニズムの生物学的機能のうちに、意味論的規範性を基礎づける（すなわち意味論的失敗を機能不全の一種として捉える）ことにより、因果論的意味論が典型的に陥る誤表象問題などを解決しようとするものである。しかし、フォーダーがカエルの例を使いながら自然選択の外延的性格に基づいて目的論的意味論を批判して以来、「心的内容の不確定性」と称されるこの問題にどう対処すべきかは、目的論的意味論が抱える主要な課題の一つと見なされている。本提題では、特に知覚的表象に関してこの問題を再考したい。

フォーダーによれば、自然選択は外延的に働くから、例えば餌となるハエが「小さく黒っぽい動くもの」と共外延的であるような環境で進化してきたカエルについて、そのカエルがハエに反応するときに生成される表象の内容は、ハエと「小さく黒っぽい動くもの」のどちらに関するものであるかが確定しないという。

目的論的意味論を採る論者がこの問題にどう対処するかは一様ではない。だが私はかつて、目的論的意味論のなかではミリカンの立場が最も妥当なものであると信じ、表象を利用するメカニズムの機能の観点から、その表象の内容はハエに関するものであると見なし、「小さく黒っぽい動くもの」は“selection for”と“selection of”の区別に訴えることによって排除されると単純に考えていた。

本提題で特に知覚的表象に着目するわけは、(もともと知覚の問題に興味があることに加えて) フォーダーのカエルの例で問題になるのも結局は知覚的表象であり、知覚の機能とメカニズムを考慮に入れた場合、ミリカンよりもネアンダー (Neander) の立場 (すなわち表象の消費者よりも生産者を重視する立場) のほうに説得力があると考えるようになったからである。(知覚的表象はまた、系統発生的かつ個体発生的に最も基礎的な表象であり、それゆえこの種の表象を正当に扱えるかどうかは目的論的意味論を評価する重要な指標の一つになると考えられる。)

ネアンダーの立場では、カエルの例についていえば、その表象を生成するメカニズムは当の表象を生成することによって「小さく黒っぽい動くもの」に反応することをその機能としており、そのようなメカニズムの機能こそが基本的に知覚的表象の内容を決定する。だから、そのカエルの表象の内容はハエではなく「小さく黒っぽい動くもの」に関するものである。

なぜこの立場のほうに説得力があるのか。本提題では主にこれについて、ピエトロスキの架空の動物の例やドレッキの走磁性細菌の例なども引き合いに出しながら説明する。また、目的論的意味論 (あるいはより一般的に自然主義的意味論) そのものの意義や是非についてもバージの批判などを踏まえながら簡単に触れることにしたい。